

毎年社会福祉学科の学生として数十名の学生が入学され、年と共にこの学部が発展してゆくのをみることは古く卒業し同じ道を学んだ私にとつてはこの上ない喜びである。みなさまが現在の社会を認識し、社会科学の知識を得、又社会福祉に対する理解と協力の念にもえ、この困難なる現代社会のために少しでも貢献しようとしていられるのを感じ、心から敬服し、皆様の上に神の栄光がゆたかならんことを祈らずにはいられな。

社会福祉学科に学ぶ

若き世代に望む

聖路加国際病院社会事業部

さて、四カ年のきびしい修業の後には、その智恵と技とをもつて、社会福祉の色々な部門で活躍されることである。

最近では精神衛生や医療部門にソーシヤル・ケースワーカーとして働く人も多くなされたと思う。私は聖路加国際病院で、メデカル・ソーシヤル・ケース・ワーカーとして働きだしてから最早十七年間この仕事

をつづけている。この仕事は、決して華やかな仕事ではない。然し私はこの仕事を自分の使命として励み、いくらかでも世に貢献していることに確信を持つている。

このメデカル・ソーシヤル・ケース・ワーカーは単なる慈善事業などではない。病める人の健康回復のために、その治療の面に対して医者・看護婦に協力して、円滑なチー

吉田ますみ

(二十四回生)

ム・ワークによつて果される仕事である。であるからメデカル・ソーシヤル・ケース・ワーカーは医療機関に働く一技術者である。その様なわけでこの仕事を担当する者はただ世間に馴れた年輩者であれば誰れでも出来ると思うのではなく、皆様のよう

上に社会福祉学科の学生としてよく学んだ人達がこの様な仕事についてこそ本当によき仕事の成果を挙げられることが出来るのであると思う。実際にみなさま方とあまりへだたりのない卒業生、二十六年卒業の猪股佳子さん、二十九年卒業の中田和子さんの二人の若い先輩たちも実によい仕事の成果を挙げつつ、一生懸命に働きよく研究している。私はこの二人をみて、今後卒業されるみなさまが一人でも多くの仕事に就かれることに大きな期待をもっている。そこでいざこの仕事に就こうとするとき、少しも医学の面の知識のないことを不安に思われるかも知れない。けれどもこの方面の勉強は、就職後でも学ぶ方法はいくらでもある。尚この他大切な技術面の勉強は日々の研究が必要である。その様にして毎日の経験と研究をつんで立派な一人前のケース・ワーカーとなつてゆく。このメデカル・ソーシヤル・ケース・ワークは婦人の仕事として全く適した尊い仕事であると思う。何故なら病人であつて尚その上に精神的、社会的の色々な苦しみを持つて悩んでいる人人に私慾のない真心と愛の心の豊かな婦人が科学的なる専門的技術を持つてこの人

職場（聖路加）だより

達の助力者となることは、本当に病める者にとつて必要な大切なことであると思うから。では終りに、どの様な問題を実際に取扱つてゆくかを大ざつぱりに記してみよう。

一、患者が自分の病氣治療に対して理解が乏しいために、折角の医師の治療も効果が充分に挙げられないような場合。メデカル・ケース・ワーカーは患者に彼等の病氣についてよく説明をして

患者が自分から一生懸命にその治療を受けることが納得出来るように指導する。

一、患者が治療を受け度くとも経済的理由で途中で於て中止しなければならぬような場合、メデカル・ソーシャル・ケース・ワーカーはこの人の経済的、社会的の面を診断をし、その人に応じた方法で指導したり処置を行う。

一、患者の精神的苦悩が病氣治療の妨げとなる場合が非常に多いので、メデカル・ソーシャル・ケース・ワーカーはその患者の苦悩を軽くし安心して治療を受けら

れるように患者の色々の問題を調整したりする。

一、患者の病後静養についての相談。

一、患者一人だけでなくその家族の健康に關する相談や指導。

一、療養所の紹介。

一、公的保護を受けることが適当な人にはその手続きなど指導したりする。



一、その他その患者が当面している色々の

困難な問題の調整のために相談をする。

以上は日々取上げられてゆく問題の中からひろい上げていくつかを記したまでで

あるが、大體のことは分つて頂けると思う。

終りに社会福祉学科の学生の皆様の健康を祝し、主の恵のゆたかならんことを祈り筆を擱くことにする。

メデカル・ケース

ワーク雑感

聖路加国際病院

猪股佳子

(新制二回生)

社会福祉学科に学んだ特色を生かし、又自分自身を考えて、メデカル・ケース・ワークを選び、聖ルカ国際病院社会事業部に就職以來早くも四年を経過した。顧みると云い尽くせない程様々の経験をしたものと感慨深いものがある。

初めの一年は全く夢中であつた。吉田主任の部屋でケースとの面接の見学をしたがら、家庭訪問、記録、院内の連絡等一つ一

つ教わりながらつづけてきた。傍ら週一回のスタッフ・ミーティング（臨床研究発表）に出たり、内科医師より毎週一回社会事業部員三人に講義をしていただき、一年間続けた事もあった。その間、勉強に來てゐるようでもつたいな気がしてゐた。一方、今思えば恥かしい事であるが、早く自分でケースを持たない事に焦燥を感じた事も度々であつた。當時は主任の社会診断及び細かい取扱技術についてもよく理解出來ない事が多かつた。今考へると其れ等は皆、主任の仕事の熟練からくるところの適確な判断と先見であつたのだが、何でも出来るように考へてゐたのは卒業当時の事だけで、一年後の私は、全く自己の未熟さ、無能さの上に立つて、新たな出発をしなければならぬような氣持になつた。

ケース・ワークが円滑になされる為には、広汎なあらゆる知識が応用されなければならぬという事は非常な魅力であると同時に、絶えざる努力が大切である。又ケースを取扱つて行く途中には、ケース・ワーカーの物の考へ方、見方、即ち、人生觀、宗教觀迄が影響してくるのである。それは教育が教える知識そのものだけでなく

く、教師の人格の影響が大きいためそれに似てゐる。仕事に対する初めの無自覺さが、こゝして段々とくずされていつたのも、日々小さな一つ一つの経験からであつたらうか。

二年後、主任よりケースを持つてみるよりに云われて面接した時は、本当に熟達された主任の面接を見ていたにも拘わらず、個々の場合の複雑な事は全く新たな当惑となつて、一々主任に相談して見ていただくような状態であつた。直面する現実の困難に対して、如何なる場合でも、ケースと一諸に手をこまぬいていられないケース・ワーカーの心情をつくづく今更のように思ひ知らされたのも此の時であつた。しかし責任は進歩の段階である。本当に、集中して真剣にケースの事を考へ出したのも此の時からである。二年間もの長い間色々指導を受け、見聞した事柄が、自信と勇氣となつて、意識するとしなむとに拘わらず役立っていた事は云う迄もなかつた。

取り扱つた事例の一々について限られた紙面では詳しく言ひ尽せないのが残念である。一口に要約して興味あるものをあげるなら、全く近所の医師から見離され、死を

覺悟してゐた患者の妻の当部への相談から、診察がなされ、榮養失調症、神経症の診断にて、再び元氣を回復した例、自殺未遂で入院して、費用の相談に來た家族に、患者の神経科診察をすすめて、今後の方針、家族の取扱上の注意等も与えられた例、又、癲癇で治療に訪れた患者の親子關係の問題を見出し、その調整を計つた例等等、解決の糸口がとけて、患者及び家族の者の満足して報告に來られる事は、私にとつて大きな喜びの一つである。こうして仕事をしている中に、当部だけで設けでゐるスタッフ・ミーティングでは、折々に起る問題、取扱技術の細かい点にまで討議を行なつてゐる事は非常に有意義である。ケース・ワークは細かい技術であると思へさせられたり、單に、技術のみに終つて、ケースへの愛情、同情を失ひかけていた時に、ハツとさせられたのも此の会合を通してであつた。如何なる仕事でも、前途は絶えざる勉強と努力の道であるように、ケース・ワークも亦その連続である。

終戦後既に十年此の仕事は一段と盛んにさせられてきたが、未だ未だ多くの人達の理解と協力によつて育てられなければなら

職場（聖路加）だより

就職一カ月後の感想

中田 和子

（新制四回生）

ない事を思う時、私の小さな一步一步の歩みは本當に微々たるものである。

就職する場合誰しもがもつものは希望と不安であると思う。新しい生活に飛び込む場合に幾分かの不安をもつのは当然であると考ええる。私もその例にもれず今迄の学生生活から社会へ出る事、就職する事に対して一種の期待と不安とをもつて卒業した。幸いにして私には、メデカル・ケース・ワークの仕事が与えられたが、この仕事に対して最初、医学的知識がない為非常に不安を感じていた。しかし、私の場合、よき環境を与えられた為その不安は幾分消え去つて来ている。勿論メデカル・ケース・ワークであるからその方面の知識を要求される事は当然であるが、単にその方面の知識だけではケース・ワーカーとして不足であり、一般的な社会学的知識がそれ以上に要求されていると感じさせられる。今迄学校で学んだ社会福祉の知識を

基礎として、その上更に、医学的方面の知識と専門的技術が要求されているのだと思う。私の場合には、現に職に就いてから医学方面の勉強をしていく機会を与えられ、よき指導者のもとによき理解を与えられて生活している。勿論、私としても就職してわずか一カ月程の期間であるから確かな事は云えないが、自分がその仕事に対する熱意と責任観をもつて進んでいくならば、今後は、ケース・ワークの仕事にたずさわつていく事が出来る様な気がする。医学的知識は就職してからも学ぶ機会はあると思う。余りむずかしく考えようと手も足も出ない形になつてしまふが、その人の努力次第でどんな事をもなす事が出来るのではないだろうか。人は年と共に発展し、向上進歩する事が予期されているのであるから、徐々であつても進歩していくはずだと考える。だから私は、今医学的知識がなくても、今後の努力次第でメデカル・ケース・ワークのこの仕事をしていく事が出来ると思う。今迄私は社会事業について暗い感じを与えられていたが、実際にこのメデカル・ケース・ワークの仕事に就いてみると、實際明か

ものではなく、むしろ患者の健全になつた時の喜びの方がより大きく、地味な暗い面を補つてなお余りあると思う。

人間対人間の關係故にむずかしい面も多いがそこにこそその仕事の面白さを感じられるのである。今、私はこの仕事を与えられた事に大きな喜びと深い感謝をもつてゐる。医学的知識がない事も、技術が未熟である事も自分自身わかりすぎる程わかつてゐるが不安にこそなれ、これを少しも恐れはしない。私が今、一番恐れてゐる事は、周囲がごとごとくの場合に援助を与えてくれ、まだ最初の為私もそれに頼つてゐるが、社会一般の評価は決して甘いものではなく、それは実力に対してのみ与えられるものであるから、結局周囲に何時までも甘えずに実力を養う事が出来るかどうかというところである。周囲は私がのびていく為の機会を与えてくれるがこれに対して私がどこまで進んでいく事が出来るかが問題である。要するに私達社会福祉学科に学んだ人々がメデカル・ケース・ワークの仕事にたずさわる事が出来るか否かはその人、一人一人の日々の努力、研究如何によるものであると思う。